

信

月曜評論

対日イメージと日本の将来

米中会談、米ソ会談と米中ソ三大国による華盛頓大国外交の二ラウンドがおわった。一連の米中外交は、それそれの利害と感情から出発して、それなりの大きな成果を取めたことは疑いない。しかも、いずれの首脳も、情風花時代にふさわしい「イメージの政治」の効用をいかにうまく利用して国内政治への反響を大いに意識した派手なシ

ウをくりひろげたのである。一方、ベトナム戦争の解決という緊急の課題については、米中ソ大国外交は、即時的な解決策を見出せずに、インドシナは再び泥沼の兩期にはいつてしまった。

にほかならない。そうした国際環境に對立し得る國際的な視野をもたねばならないことは自明でありながら、一口に國際的な視野といっても、この問題は

領土をも奪回し、アジアの現状を憂慮してますますシロース・アップしつづけるなど見られるのである。わが国の沖縄をめぐる論議は、こうした國際問題

の順序としていわば自明のことのようにみている諸外國の意見が自立をほめていっていることある。そして、そのような選択は、自明のことでなか、日本にとりましても必ずしも選好あり、もっともコストの高い危険な方向であるというわれわれの論議が、論理的には十分に可能である。はたし相手の心算において十分にこのことを期待できるかどうか、今日

大すべきだといつて日本を励ましてくれたり、日本の核保有をえも肯定して、「将来、中国、日本、インドも原水爆をもつては、自明のことではなか、日本」と発言したことがあり、また数年前には、ハマーン・カーン氏が「二十一世紀は日本の世紀」ともちあけて一部の日本人を大いに喜ばせたことがある。だが今日では、もはや難もそのような美辭麗句で日本をたてはけないし、励まして

三股事件以来、先の選合赤軍事事件を経て今回のテルアビブ空港事件にいたるまで、諸外國から見て不可解な、あるいは恐るべき日本人というイメージをいやすがえにも醸成してしまつたようである。私には、三股事件のとき、たまたま香港に在住して、この事件にたいする外國人の反応の強さに驚きときであるのであって、ここで日本が安易にキッシンジャー構想に乗り進むことにも私は賛成できない。たまたま私たちが國際政治・國際關係の學者の若干名は、きょう(十二日)キッシンジャー氏と懇談するので、氏がどのような日本認識をもっているのか、十分に確かめたいと思つている。

う簡単なことではない。たとえは、沖縄返還という最近の日本にとって最大の課題一つをとってみても、これを国内問題として考えれば、われわれ日本人自身が解決しゆかねばならない数々の問題をほらんで

としてこの沖縄返還という視点が完全に欠落していたように思われるが、私は、しばしば國際會議に出たり、外國の友人と語りあつて、この点をひびく感

ではそれがかりむすかしいことになつてあることを私はしばしば感嘆を覚える。それほびまに、日本にたいする諸外國の今日の認識はぬきまじらないものになつてしまつた。

かして、日本の力量がまた小さかつた一九五五年に、毛沢東が今日の世界の指導者層のなかに

もくれない。もっとも、日本を大國視することの危険をブレジンスキー教授「コロンビア大に残された日本像にいましばらく耐えてゆかねばならないだろう」と評いたことがあがるが、日本人は今後、國際環境の厳しさを

き、「われわれ日本人は、この『血縁(け、わん)』のあとに残された日本像にいましばらく耐えてゆかねばならないだろう」と評いたことがあがるが、日本人は今後、國際環境の厳しさを

【中嶋嶺雄氏略歴】昭和四十年東京大学国際関係論課程卒。四十二年東京外国語大学助手。四十四年大専任教授。四十四年から同大助教授。専攻は國際關係論・現代中國學。昭和五十二年五月十一日松本市市長。三十六歳。埼玉県上福岡市公務員宿舎七の二〇三。



中嶋 嶺雄

まへ國際環境は、ますます厳しいものになつていゝ。それは、われわれ日本人の認識を越えて、諸外國が日本の存在をますます大きく意識しているから

近、感じても一つの問題は、日本の経済力が今日のように増大したからには、日本が近い将来、核大國への道を進むのが当然かといふような意見が、この

さかたつた一九五五年に、毛沢東が今日の世界の指導者層のなかに

定着しはじめていゝことは事実である。

そのうえ、今日の日本には、絶対化して盲目的につづは

短な狭い視野から、右であれ左であれ、一つの結論と方向を

つてゆく危険はないであらうか。いま、来目している法目のキッシンジャー米大統領補佐官は、彼一流の勢力均衡論から米・ソ・中・日本・E.Cの五極の力の均衡によつて世界を維持しようと考えているようであるが、いま、日本人は、じっくりと自分自身をみつめ、自衛すべきときであるのであって、ここで日本が安易にキッシンジャー構想に乗り進むことにも私は賛成できない。たまたま私たちが國際政治・國際關係の學者の若干名は、きょう(十二日)キッシンジャー氏と懇談するので、氏がどのような日本認識をもっているのか、十分に確かめたいと思つている。